

第1章

はじめに

研究の概要と本報告書の構成について

研究の概要と本報告書の構成について

1. 趣旨及び目的

言語に障害のある子どもの教育において、吃音については未だその原因が解明されていないこともあり、現時点で、症状の治癒・改善に向けた効果的な治療法・指導法は確立されていない。結果的に治癒する場合もあるが、生涯にわたり治癒しない場合も多く、またその予測も困難である。したがって、当事者及び保護者においては、吃音に対し、症状の治癒、軽減、受容、その他、立ち向かう態度が決まりにくく、精神的な揺れが生じやすい。治癒にこだわり続けるあまりに（結果的に治癒する場合はともかく）、そのことが生活の全てになる、成長していく上で重要な人生の諸課題がなおざりになる、といったことにもなりかねない。さらに、話すことに対する不安、人や社会に対する恐怖、自己否定等、吃音症状はもとより、吃音があることによって生じる様々な問題を抱える場合も多く、吃音のある子どもへの指導・支援の在り方は、言語障害教育を担当する教師にとっても課題の一つとなっている。

現在までに吃音のある子どもへの指導・支援は、ことばの教室等において多種多様な取り組みが実践されてきているが、吃音のメカニズムの不明確さゆえに、「吃音は治るはず、否、治らない」「症状に対するアプローチをすべき、否、症状には触れない方がよい」「少しでも症状の改善をはかるべき、否、どもっても生き生きしていればよい」等、極端な考え方の対立を生み、混乱を生じさせてもきた。

上述したような吃音をめぐる現状においては、吃音の原因をはじめ、そのメカニズムの科学的な解明、症状を改善ないし軽減する、あるいは少しでも楽に話すための方法開発等に向けて研究がなされる一方で、生涯にわたり吃音を持ち続けることも視野に入れて、吃音のある子どもが自身の吃音と上手く向き合い、吃音に翻弄され続けることなく日々を過ごし、成長していくことを支えるという視点での支援のありようを構築していくことが重要と考えられる。近年、このような視点に立った実践の模索・試行の報告も見られるようにはなってきたが、実践を考える上での不可欠な要素、内容・方法等、実践の具体的な姿、形は十分に見えていない。ことばの教室等の多くの言語障害教育担当者に参考となる知見・資料を提供するためにも、ここで議論・検討・整理を行う意味は大きいと考えられる。

以上のことから、本研究では言語に障害のある子どもの中で、特に吃音のある子どもに焦点を当て、彼らが、吃音であるがゆえに必要以上に自己を否定せず、自己の吃音と折り合い、自己に対する肯定的な捉えを育んでいくために、ことばの教室等、教育の場ではどのような支援が可能なのか、その内容・方法を検討することを目的とした。

2. 研究経緯

上記の目的に向けて、以下の研究活動を行った。

- 現在までの吃音に関する研究、実践報告の収集・検討を行った。
- 吃音のある子どもの自己意識に関する資料の収集・整理、及び参考として他障害に関する資料の収集を行った。
- 吃音のある子ども（人）の肯定的な自己感を支えること、吃音と上手く向き合うことを目標にした取り組みの収集・検討を行った。
- 上記を進めるとともに、そこで得られた情報も踏まえ、研究協力者、研究協力機関を委嘱し、実践報告と討議を重ね、訪問・参観しての授業研究も行った。
- 各地のことばの教室担当者、学校・教室外における吃音当事者の集いの場、等から聞き取り調査を行った。
- 成人吃音者、吃音のある子どもの保護者、ことばの教室担当者による公開討論会（吃音教育セミナー）を開催し、議論を深めるとともに、その場に参加した、ことばの教室担当者、吃音者から資料収集を行った。
- 研究協力者、研究協力機関の代表協力者、所内研究分担者による研究協議会を行い、以上の資料をもとに議論した。議論の主な観点は、吃音との直面、グループ（小集団）指導、学校・教室外での活動等であった。
- 以上を整理し、本報告書をまとめた。

3. 本報告書の構成

本報告書は、本研究の概観を紹介する本章（第1章）の他、大きく分けると、次章の第2章から第4章にかけての、実践・研究の動向や議論の整理から得られた知見のまとめと、第5章から第7章にかけての、様々な実践報告からなる。

第2章では、本研究の議論の観点や、吃音のある子どもへの指導・支援をめぐる主要なトピックを、全体を読み進めるために必要な基礎的情報の解説も加えながらまとめた。その上で、各章の論考・報告の位置づけを整理した（研究代表者）。

第3章では、吃音及び自己意識研究の概観、自己意識及び自己肯定感に関する心理臨床的知見を踏まえ、吃音問題の本質と必要とされる支援の視点、吃音のある子どもの自己意識と自己肯定感を支えるための視点を論究した（研究協力者、研究協力機関代表協力者、研究分担者）。

第4章では、各地のことばの教室、団体等への実地調査を通して、実際的取り組みの現状をまとめるとともに、そこから示唆される知見を整理した（研究分担者）。

第5章では、本研究の観点に基づいた、ことばの教室における実践的取り組みを報告し

た（研究協力者）。

第6章では、ことばの教室等での実践に役立つ教材開発と、それを用いた実践について報告した（研究協力機関代表協力者）。

第7章では、学校・教室外での吃音のある子どもの集いの場における実践的取り組みを報告した（研究協力者、研究協力機関代表協力者）。

第8章では、研究全体を簡潔にまとめるとともに、今後の課題にも触れた（研究代表者）。

以上に加えて、巻末には資料として、本研究活動の一環として企画・実施した「吃音教育セミナー」の報告を掲載した。

4. 本研究成果の発表及び本研究に関連した取り組み

<平成16年度>

- ・青山新吾・牧野泰美：

吃音のある暮らしへの援助（2）－在籍学級担任との連携についての一考察－.

日本特殊教育学会第42回大会発表論文集，770.

- ・日本発達心理学会第16回大会ラウンドテーブル：

通常の学級に在籍する障害のある子どもの自己意識－高機能自閉症児、難聴児、吃音児について－.

<平成17年度>

- ・青山新吾・牧野泰美：

吃音のある暮らしへの援助（3）－ことばの教室における集団指導の意義－.

日本特殊教育学会第43回大会発表論文集，752.

- ・吃音教育セミナー

（本研究チーム主催による研究活動と知見の紹介、公開討論。於：岡山県総合福祉会館）

- ・日本発達心理学会第17回大会ラウンドテーブル：

通常の学級に在籍する障害のある子どもの自己意識－肯定的な自己意識の形成をどのように支援するか－.

<平成18年度>

- ・牧野泰美：

言語に障害のある子どもの教育と自己肯定感への支援. 発達，106号，37-41.

- ・牧野泰美・松村勘由：

吃音のある子どもの自己肯定感へのアプローチ（1）－趣旨と概要－.

日本特殊教育学会第44回大会発表論文集, 306.

・松村勘由・牧野泰美:

吃音のある子どもの自己肯定感へのアプローチ(2) - ことばの教室における実践 -.

日本特殊教育学会第44回大会発表論文集, 307.

なお、上記の誌上、学会における発表等の他、本研究所における研修での講義（「吃音と自己肯定感」平成18年度短期研修言語障害教育コース）をはじめ、各都道府県における研修講座や、各地の難聴言語障害教育研究会主催の研修等において研究成果の一部を活用した。

(牧野泰美)